

飼育レポート1

トナカイの誕生と親子初遊泳

飼育展示担当 柴田 典弘

サクラ(メス11歳)が出産予定を迎えた2016年6月初め。いつ産まれるかと毎日朝早くから確認していましたが、待っているとなかなか産まれないもの。6月14日、この日も大きな変化や兆候もなく、そろそろキリンの収容準備に向かおうとした15時過ぎでした。右腹部を下に座って休んでいたサクラが、一旦立ち上がり、



生後4日の元氣

直ぐに左腹部を下に座り直したのです。この行動こそ、ずっと待っていた出産兆候の一つでした。その直後、大きく深い呼吸に変化。さらに5分後には呼吸が荒く、早くなりました。尾がピンと真上に向き、力む様子も見られたので、まさに祈るような思いで観察と記録を続けました。それから15分後、赤ちゃんの前肢が出たのを確認、15時34分無事に出産となりました。

比較的安産でしたが、赤ちゃんはなかなか立ち上がれず、17時57分に介添えした上で立たせ、サクラの乳を絞り初乳を飲ませました。その日のうちに立ち上がれるようになりましたが、体力がなく直ぐに座ってしまうため授乳確認ができず、数日間は人工乳も併用して成育を見守りました。約1週間で状態は安定しましたが、同時進行で暑さとの戦いが始まっていました。こまめに体温を測定し40℃を超えると熱中症対策として緊急冷却処置を行うなど、細心の注意を払っての飼育管理が続きました。

8月13日の午後、「元氣」と命名された赤ちゃんは、避暑を目的としてサクラと一緒に園内の塩曳潟へお散歩。泳ぎが大好きなサクラは昨年は放牧直後から泳いでいましたが、この日は不思議と泳ごうとせず青草を食べていました。約15分後サクラが突然向きを変え入水すると元氣も躊躇することなく水に入りました。初放



親子で塩曳潟を遊泳

牧で初親子遊泳へと発展しました。トナカイが元氣に秋田で暮らせるように、今年も最善を尽くします。

飼育レポート2

カピバラの同居と繁殖

飼育展示担当 小川 裕子

野生のカピバラは南米の熱帯地域に生息しており、10~30頭位の群れで生活しています。群れのリーダーはオスです。オスには目と鼻の間にモリージョという黒い楕円形の大きなコブがあります。

大森山にはメス4頭とオス1頭の5頭のカピバラがいます。オスのコムギは、埼玉県動物園から2014年に仲間になりましたが、体も小さく、メスに受け入れられなかった様です。またメス同士も相性が悪かったので長い間個別飼育をしていました。

ここで動物園用語を紹介し、乗り越しに飼育し、お互いに慣れてもらう事を「お見合い」、柵を取り払って同じ空間に入れる事を「同居」と言います。私は飼育員になって2年目ですが、この動物園用語が新鮮で驚きでした。



鼻のモリージョが目立ってきたコムギ

コムギとメス達は、長い時間をかけてお見合いをしてきました。カピバラはとても鋭い前歯を持っているため、同居の時にケンカして皮膚が裂けてしまうこともありますが、繁殖期は同居が成功しやすいので、5月から開始しました。カピバラ同士がケンカを始めたらサスマタや水をかけて離さなければなりません。他の飼育員にも協力してもらい、オスとメス1頭ずつ5分間から同居を始めたところ友好的に終わり安心しました。個体を変えながら同居訓練を全頭で行い、約2週間で1つの群れになる事ができました。

カピバラの妊娠期間は約5か月です。群れになった5月下旬から5か月後の10月下旬に2頭のメスが6等の子を産み、今では10頭の大所帯になりました。コムギは大きなモリージョもでき、りっぱなリーダーに成長しました。



ぐらと赤ちゃんたち

飼育レポート3

レッサーパンダの成長日誌

飼育展示担当 藤原 直樹

2016年4月からレッサーパンダの担当になり、前担当から「ゆりが妊娠している」と申し送りがありました。出産予定が近づくとつれ、心構えはしていましたがいろいろ不安になってきました。7月13日朝、産箱内のモニターにゆりのおなかの上に赤ちゃん2頭の姿が映っていました。「やったー！」と叫びたい気持ちを我慢し、無事に初産のゆりが育児できるような静かな環境維持に努めました。

2頭は体毛が濃い・淡いとはっきりして識別しやすく飼育員孝行です。モニターで確認すると、ゆりは物音にも動じず、しっかり2頭に授乳しています。出産10日後には、ゆりが産箱から出ている時間が長くなってきました。夏の暑さと育児疲れで、寝室の床でうたた寝している様子も見られました。

15日齢の7月28日、初めての体重測定を行い、体毛の濃い方が260g、淡い方が280gとほぼ順調な成長でした。42日齢の体重測定では、濃い方が660g、淡い方が760gと2頭の体重差は100gになっていました。モニターを確認すると淡い方が乳が多く出る乳房を独占しているのがわかりました。

50日齢の体重測定では、濃い方は760g、淡い方が880gと体重差が広がりました。

56日齢に雌雄判別を実施し濃い方がオス、淡い方がメスと判明し、その後の命名式でオスは「ケンタ」、メスは「小百合」と名付けられました。ケンタの体重が思うように増えないため、11月15日から、パンダミルクをスプーン攪り切り1杯、リンゴ1/4個とバナナ50gのすりおろしを50ccの湯で混ぜ合わせた流動食20mlを1日4回飼育員が直接給餌することにしました。10日後には、1回あたり25mlに増やし順調に体重増加がみられたため1月2日で給餌を中止しました。1月7日現在、ケンタ2.18kg、小百合2.54kgと差はあるものの食欲旺盛でゆりの餌まで食べるほどになりました。

春の開園時には大きく成長したケンタと小百合に会いに来てくださいね。



直接給餌中のケンタ



ケンタ(左)と小百合

動物病院から

ハズバンタリー トレーニングによる キリンの血圧測定

獣医師 小川 裕子



リンリンの血圧測定の様子

動物の診療には、保定といい、人間が動物を動かさないように押さえる事が重要です。犬猫病院で勤務医をやっていた頃「診療で大事なのは保定9割、技術1割」とよく院長に言われました。犬や猫の診療では、保定方法が確立されていますが、動物園にいる大型動物にはこの保定方法は通用しません。そこで動物園では「ハズバンタリートレーニング」といって、イルカの調教や犬の訓練と同様に、人間が指示した行動ができれば、餌を与えるという事を繰り返すトレーニングを行っています。

大森山動物園はキリンのハズバンタリートレーニングが有名で、キリン担当の飼育員は、日本中の動物園でこの技術を教えています。このトレーニングは獣医師にとっては、キリンの採血や静脈注射、削蹄をやる時に役に立ち、最近では血圧測定も行っています。キリンは頭と心臓の位置の高低差が大きい動物です。心臓から頭まで血液を送る為には、かなりの血圧が必要になると推察していました。現在、キリンの血圧は麻酔下やキリンを押さえた状態での血圧値が報告されていますが、平常時の血圧は報告されていません。そこで当園のキリン2頭で血圧を測定した結果、収縮期血圧が約230mmHg、拡張期血圧が約160mmHgと人間と比べかなり高い血圧ですが、報告されていた測定値や推察していた値より低い測定値でした。

動物園の治療では、吹き矢を使って注射をする事が多いのですが、キリンに吹き矢を打つと驚いて走り回り、怪我をしてしまう事があります。当園で飼育しているリンリンが鼓張症という胃内にガスが溜まる病気になった時、ハズバンタリートレーニングのおかげですぐに薬を静脈注射でき、回復も早かった事がありました。日頃の訓練の賜物ですね。